



地球惑星科学連合（JpGU）2018年大会 開催報告

濱本昌一郎

今年の連合大会は、5月20日～24日（5日間）に、幕張メッセ国際会議場を中心として開催された。今年度大会も、アメリカ地球物理学連合（AGU）などとの多数のジョイントセッションが設けられた。発表件数は5,000件程度（セッション数は230件）あり、AGUとの合同大会であった昨年度に引き続き、非常に規模の大きい大会であった。今年度大会では、現場見学会など開催地である「千葉」にちなんだ複数の企画が新たに開催された。また吉事として、宮崎毅先生（東京大学名誉教授、平成13-14年度土壌物理学会会長）が2018年度日本地球惑星科学連合フェローを受賞された。

昨年度に引き続き、連合大会のセッションは宇宙惑星科学、大気水圏科学、地球人間圏科学、固体地球科学、地球生命科学、教育・アウトリーチ、領域外・複数領域、の7つのカテゴリーと、二つの特別セッション（パブリック、ユニオン）に分類された。2018年度大会は、土壌物理学会の共催セッションとして、次の3つのセッションが開催された。セッションタイトル：Subsurface mass transport, material cycle, and environmental assessment（地質媒体における物質移動、物質循環と環境評価）（大気水圏科学 A-GE31, 代表コンビーナ：小島（岐阜大）、5月21日）、セッションタイトル：Materials transport and nutrient cycles in watersheds; Human and climate impacts（流域の物質輸送と栄養塩循環 — 人間活動および気候変動の影響 —）（大気水圏科学 A-HW20, 代表コンビーナ：斎藤（岡山大）、5月20-21日）、セッションタイトル：What scientists should do for reconstruction after Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Accident（福島第一原子力発電事故後の地域復興で科学者が今後取り組むこと）（地球人間圏科学 H-CG26, 代表コンビーナ：西村（東大）、5月22日）。A-GE31とA-HW20セッションの発表言語は英語、H-CG26セッションの発表言語は英語と日本語両方である。土壌物理学会会員による発表が各セッションで見られ、他分野の研究者を交えた活発な議論と交流が深められた。

本資料では、上記3セッションの概要および本大会での様子を報告する。